

<ショパンの音楽の源泉となったウィーン式ピアノ>



映画『戦場のピアニスト』の劇中、戦地から奇跡的な生還を果たした主人公が演奏していた曲としても有名になった、ショパン作曲のノクターン嬰ハ短調（遺作）。この作品はショパン 20 歳の年、1830 年に作曲されたピアノ曲で、姉のルドヴィカに送られています。前年に既にウィーンでデビューを果たしていたショパンはこの年に祖国ワルシャワを離れることとなります。祖国への別れと同時に、当時ショパンが密かに恋心を寄せていたワルシャワ音楽院の声楽科に通う、コンス

タンツヤ・グワトコフスカとの別離を悲しむ心の内を表現したかのような、実に美しく感傷的な作品です。

ワルシャワを離れるまでショパンは、フリデリク・ブッフホルツ Fryderyk Buchholtz (1792-1837) 製作のピアノを所有していたと言われています。ショパンが 1830 年にワルシャワを離れるまでこの楽器は彼の音楽活動のパートナーであり、彼の音楽の源泉となるものでした。ブッフホルツはポーランドを代表するピアノ製作家の一人で、1815 年にはワルシャワで工房を開いています。ショパンは度々彼の工房を訪れ、ショパン家は 1825 年以降にブッフホルツの楽器を一台購入したと伝えられています。残念ながら現存はしていません。それは 1863 年の 1 月蜂起の際に、ショパンの妹イザベラ・バルチンスカが居住していたザモイスキ宮殿がロシア軍兵士により破壊され、ショパンが所有していたピアノは窓から投げ捨てられてしまったのです。この悲劇はポーランドの詩人ツィプリアン・ノルヴィト Cyprian Norwid は「ショパンのピアノ Fortepian Szopena」という詩によって今日に伝えられています。ショパンが所有していた



たブッフホルツのピアノはウィーン式（跳ね上げ式打弦機構）であったと考えられており、現代のピアノと異なる特別な打弦機構を備えていました。ウィーン式アクション（打弦機構）は、跳ね上げ式アクション（打弦機構）とも呼ばれ、打弦側（演奏者側）を向いて取り付けられている軽いハンマーを梃子の原理で跳ね上げ打弦するというシンプルな構造を持っていました。そのためタッチが軽く、音色は明快で華やか、きわめて繊細な指先の動きにも俊敏に反応し、さまざまなニュアンスを引き出すことが可能でした。さらに現代のピアノにはない4つのユニークなペダルシステムを備えていました。一番左がソフト・ペダルで、一番右がダンパー・ペダル、そして真ん中の2つは「モデレーター」と呼ばれるペダルがついていました。モデレーター・ペダルを使用すると、弦とハンマーの間に布が挟まり、柔らかく幻想的な音色に変化させることができました。またこの2つのモデレーター・ペダルの違いはフェルトの枚数にあり、布が一枚挟まるか、二枚挟まるかの違いで音色に更なる変化が生まれる仕組みになっていました。

文章:小川加恵